

大学生の自己開示における被開示者の特性における一検討

長谷川 素子

近年、青年期の大学生の抑うつ度の高さが指摘されている。精神的健康が悪い際に、専門家に援助を求められないという報告もあり、普段から援助を求められるような関係を築くことが重要であるといえる。では、どんな相手であれば援助を求めやすいのだろうか。援助を求める最初の行動として自分のことを相手に伝える必要がある、これを自己開示という。先行研究では、親密な友人関係における自己開示の引き出しやすさについて検討されてきたが、親密な友人関係をこれから形成していく関係でも開示抵抗感のある内容を開示することが考えられるため、親密な関係に限定せずに検討する必要があると考えられる。

このような背景から、本研究では大学生の友人関係に注目し、否定的な内容の自己開示を受ける頻度が多い被開示者がどのような特性やスキルを持つかを検討することを目的とした。親密な関係において、自己開示を引き出しやすい人の個人差を自己評価で測定する尺度はあるが、親密な関係に限定せず、否定的な内容の自己開示を受けた頻度を測定する尺度は筆者の知る限りではない。そのため、研究1では否定的な内容の自己開示を受けた頻度を測定する尺度を作成し、信頼性と妥当性を検討した。研究2では、共感性、注意の制御能力、ソーシャル・スキルが、否定的な内容の自己開示を受ける頻度に正の影響を与えるという仮説を立て、被開示者の特性とスキルについて検討を行った。

研究1は、大学生・大学院生を対象に質問紙調査を行い、欠損を除いた105名のデータが得られた。質問紙の構成は否定的な内容の自己開示を受けた頻度尺度、日本語版オープナー・スケール、改訂版UCLA孤独感尺度、親和動機尺度、自尊感情尺度である。否定的な内容の自己開示を受けた頻度尺度については、ストレス、ライフイベント、劣等感、心配事に関する既存の尺度から質問38項目を選定し使用した。研究2は、大学生・大学院生を対象に質問紙調査を行い、欠損を除いた125名のデータが得られた。質問紙の構成は、否定的内容の自己開示を受けた頻度尺度、多次元共感性尺度、成人用エフォートフル・コントロール尺度(以下EC)、Kiss-18尺度である。また、研究1,2に共通して、性別、年齢、友人の数、同居形態、友人と過ごす1日の平均的な時間について尋ねた。

研究1について、作成尺度の38項目をクラスター分析し、6つのクラスターを得た。各群で質問内容が類似した項目を避け、2〜3項目ずつ計15項目を選定し分析に用いた。作成尺度は内的一貫性を有していた。また自己開示の引き出しやすさ、親和動機との関連性と、性差の点から作成尺度は妥当性が、ある程度示された。

研究2では、否定的な内容の自己開示を受ける頻度に、特性・スキルが及ぼす影響を検討するために、従属変数を否定的な内容の自己開示の受けた頻度、独立変数を共感性、EC、ソーシャル・スキル、統制変数を性別、友人の数、友人と過ごす1日の平均的な時間とした階層的重回帰分析を行った。その結果、否定的な内容の自己開示を受ける頻度に、共感性は正の影響、ECは負の影響を与え、ソーシャル・スキルは影響がみられなかった。否定的な内容の自己開示を受ける頻度への共感性の正の影響は先行研究の結果を支持し、ECが負の影響を与えていたことは、仮説を支持しなかったが、特性が影響を与えていることは示唆された。特性とスキルの相互作用について探索的に検討した結果、交互作用は共感性とソーシャル・スキルの間でみられた。ソーシャル・スキルは友人関係を築く際に必要なスキルであると言われているため、友人関係形成の段階によって、否定的な内容の自己開示に与える影響が異なる可能性が示唆された。(臨床死生学・老年行動学)